

武藏坊辨慶

(三)

今

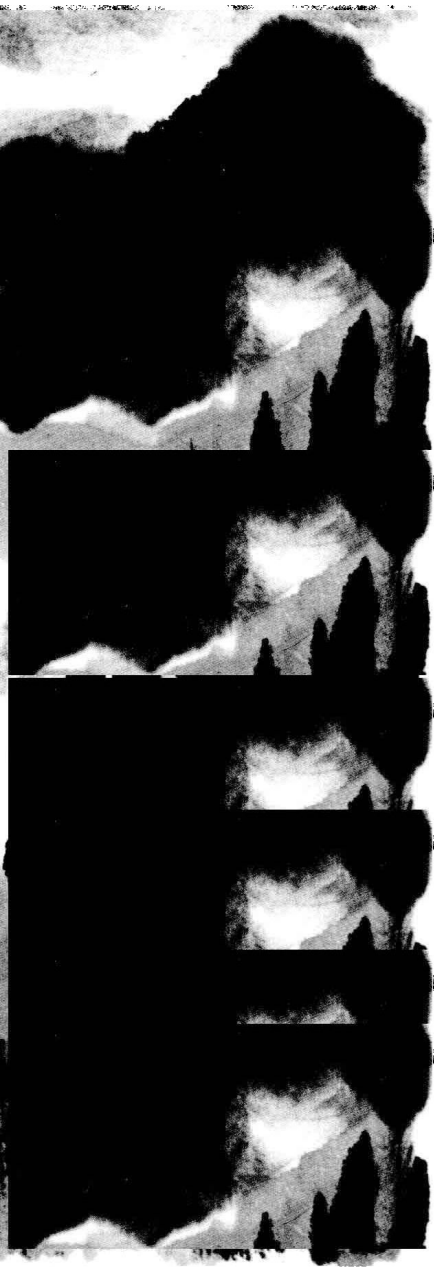
東光



武蔵坊辨慶 (三)

今東光

学習研究社



武蔵坊辨慶(三)

昭和53年 1月20日 初版発行

昭和53年 2月10日 再版発行

著者 今 東光

発行者 古岡 滉

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4の40の5

郵便番号 145

電話 東京720-1111

振替 東京8-142930

編集責任 桜田 満

編集協力 株式会社ぱびるす

印刷／製本 中央精版印刷株式会社

©1978 KIYO KON Printed in Japan

0393-164 573-1002

* この本に関するお問合せやミスなどがありましたら文書は、
東京都大田区上池台4-40-5 (〒145) 学研ユーザー・サ
ービス部「武蔵坊辨慶」係へ、電話は東京(03)720-1111へ
お願いします。

* 本書内容の無断複写を禁ず

目 次

裏切り者の系列	常陸御前	香取津	月影の井	三島の宿	すがる坂	矢作の駅	片割れ月	不破ノ関
171	150	130	111	92	71	49	28	7

塩	義	天	雲	飛	平	陸	鹿
釜	経	狗	起			奥	島
か	翔	上				見	立
ら	ぶ	人	る	檄	泉	聞	ち

323	305	286	266	247	229	209	190
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

装幀／挿画 御正 伸

武蔵坊辨慶

(三)

不 破 ノ 関

近江路を下って行くと思いがけないところに小さな部落があり、白昼堂々と曳馬をつれて通る一行の蹄の音におどろいて村中の男女が飛び出して来たりした。

都に何か騒動があつて東国へ落ちる落武者とでも勘違いしてか、あり合う得物を持ち出して来て殺気のこもつた眼で見るのであつた。こやつ等は街道筋の落人を襲つて密かに懐を肥しているのだ。

（戦さに負けてはみじめなものよ——）

と思つた。

氏素性も無い土民の手にかかつて、どれほど沢山の名ある人々がたおれたかしのれない。その中には御主の御兄弟にあたる方々も野臥や土民に襲われ給うたのだ。

先頭に立つ馬上の法師の物々しい大長刀を見ると、部落の人々はぎよつとした。あの大長刀でなでられたら幾つ首があつても足りないと思われた。

「何をじろじろ見るのじゃ」

と辨慶に「喝いっかつされると彼等はこそそと逃げ散りはじめた。

「これは比叡ひえい山の阿闍梨あじかりぞ。無体むたいに手出しをして後悔くわいさらすなよ」

と言ひ捨てると十頭の馬はさつと駆け抜けた。

荒っぽい比叡の山法師と聞いて村人等のはつとした。こんなやつ等に手出しをしたら、逆に村に放火はうかもしかねない。村の年老いた男女等は

「な、む、まいだ……」

と唱となえながら一行の後姿を拜まがんでいた。

御主ごしゅの御一行の通過には吉次殿がついているので、こういう部落を通過するには武力を用いる必要がない。それよりは鳥目ちやうもくをばらばらと投げてやるだけで無事だったろう。何といつても弓矢や太刀よりも投げ銭の方が利きき目めがあったらしい。

けれども辨慶等にはそんなゆとりはない。

「土民が襲うつて来たらば蹴散けうさんらして行け」

と海尊は言ったが

「それでは手ぬるいぞ」

と辨慶が反対した。

「然しからばどうせいというのじゃ」

「一々たつ切つて通れ。彼奴等きやつらは事あるたびに落人おちうどを襲うい、手薄てうすな旅人を苦しめ、財と見れば官物かんもつをも掠かんすめ取るやつ等じゃ。容赦ようしやするな」

「それじゃからおれが言うのよ。お主おしは無用の騒動さわどうを起すから困る。ちょっと脅おどすだけで好

い」

「そうか、そうか。そうじゃったの」

「一々通り過ぎる村のやつ等をたたく切り、火を放っては、いつ御主に追いつけるやらわからぬではないか。我等は先を急ぐのじゃ」

「わかったよ、常陸坊。これからは貴僧が先に立て」

「そりゃ不可ぬ」

「どうして」

「貴僧が先頭じゃから彼奴等が怖れて手出しをせぬのじゃ」

「あ、そうか」

辨慶は淡々と答えると依然として先頭に立って馬を進めた。

美濃路へ入ると山また山の悪路だ。

「あれに見えるが不破ノ関よ」

海道を旅した経験のある常陸坊海尊は指さして説明した。

「おう。彼所か」

あれが名高い不破ノ関かと辨慶も感慨無量でながめたが、今はいかめしい関所の威容もなく雨のもる廃屋に近いあばら家だ。

不破ノ関の名が最も古く見えるのは「日本書紀」だ。すなわち天武帝が近江朝廷の軍を遮断するために、この不破道をふさいだ。それからこれは要路であるとして事ある毎に関を設けた。

伝説によると伝教大師最澄が東へ下って信濃路へ入られたが、その時にこの不破ノ関を撤せら

れんことを言上ごんじやうしたという。すなわち桓武帝かんむていは延暦八年七月、その請こいを容いれて不破ノ関を廃せられたので、諸人往來する者が多く助かったという。

左馬頭さまたもと義朝が平治の合戦に敗れてここを通過され、頼りに思おもう家人けにんのところへ落ちて行かれた時、どんな想いをされたであろうかと辨慶はまたしても思うのであった。

今の知多半島ちたはんとうの半田の方へ入らずに、どうして尾張おわりへ行かなかったか。というのは頼朝の生母は熱田大宮司あつただいぐうじの娘だからだ。熱田大宮司のところならばそれだけで一つの軍勢ぐんぜいを掌握しやうあくすることが出来たであろう。それを想うと残念でたまらない。あるいは熱田大宮司は平家の権力を怖れて、義朝の尾張入りを悦よろこばなかったのであろうか。

「おい。妙なやつ等が居るぜ」

と海尊は、ちよつと馬の手綱たづなを控えて言った。

「どれ、どれ。何やつぞ」

と辨慶がのぞいて見ると、成程、関所らしい木造建物の傍に百騎にあまる軍兵ぐんびやうが、数騎の武者に指図されて、人待ち顔にたむろしているのであった。

「さしずめ平家の奴原やつばらかな」

「そうかもしれぬ」

「どうしようぞ」

「蹴散らいて通り抜けるまでよ」

「ま、待て」

と海尊は押えて

「おれひとりで行って来る。話し合うて、いざおれが太刀を抜いたら、談判は決裂と思え。その時はおぬしの大長刀で斬りまくってくれ」

「よし、頼む」

常陸坊はかけている白の大五条で手早く頭を包むと、裏頭姿となり、聖柄の大太刀を腰にして、巧みに馬を乗りこなしながら不破ノ関に近づいて行った。

すると一騎、華やかな腹巻をした武者が長巻をかい込んで近づくと、その長巻を横に平めて恭しく言った。

「それに渡らせらるるは武藏坊殿か」

「いや。その使僧でおじやる。して貴所には」

「これは美濃源氏の一統にて佐渡源太殿の一門にて候。やつがれは大垣弥藤太と申します」

これは難しいことになったと思った。

早や既に辨慶が佐渡右衛門尉重貞を討ったことが知れ渡って、彼等は不破ノ関で待ち伏せしていたのであるか。

何といつても右衛門尉ともなれば美濃半国をも知行している地頭職、歴々の大名だ。それほどの勢力家を討つては、その部下は承知するはずがない。弥藤太が追いかけて来た訳がわかった。如何に自分等が巧みに彼等の目をのがれて都を出ても、不破ノ関では袋の中の鼠だ。自分の領地内の関所ではのがすはずがないのだ。

「して何用ばしあつて」

「主源太より御丁重にもてなせとの知らせがござりまいて御出迎え申しました」

「あっ」

と海尊は驚いた。

あの騒ぎの中で源太はいち早く家来を走らせて辨慶が不破ノ関にかかるのを急報していたのだ。もしこれが逆だったら自分等一行は不破ノ関で討ち取られるかもしれない。

「それは、それは御念の入ったこととおじやる。辨慶殿にはあれに」

と言うと海尊は扇をひらいて辨慶を招いた。

「ほう。為信」

「はっ」

「あれ、見やれ。海尊が扇をひらいて招いているぞ」

「さては吉報でおじやりますな」

「まあず……」

辨慶等は馬を早めて関の門柱のところまで来た。

「見られい。これは源太殿の仰せによって、御出迎えの軍勢よ」

「えっ、何じゃと。あの源太殿の」

「おう、美濃源氏の軍勢じゃ。頼もしいではないか。都では平家の腐れ武者ばかりに出会うて胸くそ悪かったが、不破ノ関を越えて東国へ一步近づくと、もう源氏の方々じゃ」

すると騎馬武者が

「大垣弥藤太と申します。御見知りおかせられませい」

と挨拶した。

「いや、これは申し遅れまいだ。拙僧は比叡山西塔の武蔵坊辨慶でおじやる」

「いや。御雷名はこの田舎にても承つておじやります。主源太の申さるるには、貴僧のおかげにて三井の円満院に静養して天下の形勢を御覧になるとか。従つて貴僧の御もてなしを申しつけられ、拙きことながらこれより美濃路へ御案内申し上げようと存じます。今少しのところでおじやりますれば、なお馬上にて御出で下されませい」

「いや。御丁寧な口状じや。疲れても居りませぬで」

と一行は前後を美濃源氏の軍兵に守られながら不破ノ関を通り過ぎたのであった。天下三関の一つも今は平家になびかぬ草木もないかして、ただ吹き抜けるものは風だけで、彼等は振り返りもしないで砂塵を立てて行つた。侍大将の大垣弥藤太は

「あれがやつがれの館でおじやります」

と広々とした平野の中の一群の町家に、寺院のような大きな屋根を示した。

「弥藤太殿。先ず承りたい」

と辨慶は大垣弥藤太の館に入り、座がさだまると酒宴に先立って、先刻からむずむずしていたことを質ねた。

「何でおじやるな」

「近ごろ、奥州の金売り吉次殿の一行が通られたのを覚えおじやならぬか」

「さあて。あれは何時ごろじやったかな。たしかに通られた。何しろ名高い分限者のこと、海道筋では誰知らぬ者はないほど華奢な行列で上り下りするで」

「大垣へは寄らで」

「たしか三河にしばらく逗留とのうわさでおじやった。矢薙、長者の館ではおじやるまいか」

「やつ、三河と申さばこよりは近い目と鼻の先よな」

「というても美濃から尾張がおじやる。それから三河路になるで、まあ、御ゆっくり遊んで行かしめ。養老ノ滝へも御案内はしたいし、谷汲寺、密蔵院、明眼院などごとく天台に属しまするで、あるいは知音の御方もおいになるやも知れず、まいて永の御滞在とあれば奥美濃の長竜寺もおじやる。御承知のごとく白山神宮の別当寺にて僧兵もあまたおわすで御力にもなろうと存ずる」

「いやあ御好意は有難いが、しかし訪ぬる人もあるので道を急ぎますじゃ」

と言つても弥藤太はこの珍客を離そうとはしない。

風呂に入つて旅路のあかを流していると、妙齡の女が入つて来て

「お流しいたしましょう」

という。辨慶は

「それには及ばぬ」

と辞退したが女は甲斐甲斐しく後へ廻ると、広い大きな背中を洗うのである。

「こんな大きなお背中を見たのは初めてでござります」

と言つてけらけらと笑いころげ、果てはその背中にすがりつくようにして笑うのである。

「これ女房殿。そのように裸のわしにつかまって、この坊主が煩惱を起したら何とするぞ」といつてからかうと女は急に真面目になり

「どう遊ばそうと御随意になされませ」